

中学校社会科における 「主体的に学習に取り組む態度」の評価尺度の作成

— 2名の社会科教員への質問紙調査をもとに —

学籍番号 209319
氏名 田村 理貴
主指導教員 峯 明秀

1. 研究の背景・目的・方法

1.1 問題の所在

平成29年3月に告示された中学校の学習指導要領における観点別学習状況評価において、前身の「関心・意欲・態度」から「主体的に学習に取り組む態度」へと改められたのは、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面が一時的に表出された場面を捉えるような評価であるような誤解が払拭し切れなかったからである（国立教育政策研究所、2019）。

それでは、「主体的に学習に取り組む態度」とは具体的にどのような態度で、どのように見取り、評価すればよいのだろうか。実習校（中学校）の教員を対象に、評価するのが最も難しいと思う観点は何か、を調査したところ11名中7名（約64%）の教員が「主体的に学習に取り組む態度」と回答した。数値に表しにくく、教員の主観が入ってしまう等の理由から、評価することが困難であると明らかになった。

1.2 研究の目的・方法

本研究は、中学校の社会科における「主体的に学習に取り組む態度」の効果的な評価を目指して、学習者の具体的な姿を行動レベルで示した評価尺度の作成を目的とした。この評価においては、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、自らの学習を調整しようとする側面の2つを見取ることの必要性が示されている（国立教育政策研究所、2019）。

本研究における評価尺度の作成にあたっては、次の手続きで実施する。第1に、評価尺度の項目収集のため、平澤・久坂（2021）の「理科学習における粘り強さ尺度」と「理科における自己調整尺度」を援用し作成した質問紙について実習校の社会科教員2名を対象に回答を得る。第2に、第1をもとに作成した質問紙（「社会科における粘り強さ尺度」19項目と「社会科における自己調整尺度」20項目の計39項目）について実習校の全校生徒272名を対象に回答を得る。第3に、それぞれの尺度について清水（2016）のHADを使用し探索的因子分析を行い、因子数の抽出と項目の決定を行う。第4に、両尺度得点間の相関係数及び両尺度間と社会科の定期考査との相関係数を算出し、妥当性についての検討を行う。

2. 全校生徒対象の質問紙調査の結果と考察

2.1 社会科における粘り強さ尺度についての結果と考察

質問紙調査の結果、235名(第1学年70名、第2学年81名、第3学年84名)の回答が得られた。「社会科における粘り強さ尺度」について、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果、固有値(共通因子の大きさ)はFactor1(第1因子)から順に、9.086、1.292、0.948、0.832、0.791となった。カイザー・ガットマン基準で判断すれば2因子解と判断できるが、スクリー基準で判断すれば1因子解となる。本研究では、スクリー基準を採用し1因子解として因子分析を行い、19ある項目のうち、因子負荷量大きい上位10項目で再度因子分解を行ったところ、尺度項目の適合度は、CFI=.938、RMSEA=0.95、AIC=130.247、BIC=164.928となった。信頼性係数は、 α 係数=.913、 ω 係数=.913、因子得点=.917となり、19項目の尺度より適合度は向上し、一定の信頼性が認められる結果となった。また、因子負荷量大きい項目から、粘り強い取組を行おうとする側面を見取る上で最も重要視しなければならないのは、難易度の高い問題や課題に直面しても投げ出さずに最後まで向き合おうとする態度であることが示唆された。

2.2 社会科における自己調整尺度についての結果と考察

「社会科における自己調整尺度」について、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果、固有値はFactor1から順に、10.890、1.502、0.905、0.775、0.675となった。カイザー・ガットマン基準で判断すれば2因子解と判断できるが、スクリー基準で判断すれば1因子解となる。本研究では、スクリー基準を採用し1因子解として因子分析を行い、20ある項目のうち、因子負荷量大きい上位10項目で再度因子分解を行ったところ、尺度項目の適合度は、CFI=.959、RMSEA=0.86、AIC=115.613、BIC=150.294となった。信頼性係数は、 α 係数=.931、 ω 係数=.931、因子得点=.934となり、20項目の尺度より適合度は向上し、一定の信頼性が認められる結果となった。また、因子負荷量大きい項目から、自らの学習を調整しようとする側面を見取る上で最も重要視しなければならないのは、社会科の学力を身に付けるために考えたり、振り返ったり、計画を立てたりしようとする態度であることが示唆された。

2.3 両尺度間及び社会科の定期考査との相関についての結果と考察

両尺度間の相関係数を算出した結果、 $r=.776$ 、 $p=.000<.01$ 、95%CI[.720,.822]であり、強い正の相関が見られた。両側面は独立しているのではなく、相互に関わり合っていることが示唆された。また、「社会科における粘り強さ尺度」と社会科の定期考査の得点との相関係数は、 $r=.489$ 、 $p=.000<.01$ 、95%CI[.385,.580]で中程度の正の相関が認められ、「社会科における自己調整尺度」と社会科の定期考査の得点との相関係数は、 $r=.276$ 、 $p=.000<.01$ 、95%CI[.153,.390]で弱い正の相関が認められた。「社会科における粘り強さ尺度」と「社会科における自己調整尺度」を合わせた「社会科における主体的に学習に取り組む態度の評価尺度」の得点と社会科の定期考査の得点との相関関係は、 $r=.395$ 、 $p=.000<.01$ 、95%CI[.281,.498]で弱い正の相関が認められた。よって、本研究により作成された「社会科における主体的に学習に取り組む態度の評価尺度」は、有意な正の相関が認められ、一定水準以上の外的妥当性が確認されたため、評価方法の一つとして尺度の有用性が認められた。